

とは、2017年に宗教改革500年を記念した数々の研究成果においても見落とされてきた事象であろう。

確かに2017年は宗教改革500年にあたり数々の研究成果が現れた。しかし、本書のように〈ルターの宗教改革からトリエント公会議まで〉という使い古された図式的な時代理解では見落とされてきた、14世紀後半から17世紀以降にまで続くキリスト教思想・霊性史の根底にある「低地諸国」の神秘思想の意義を問い直す研究はなかったように思われる。その点でも本書は広く読まれてよいだろう。

---

Thomas M. Osborne Jr.

*Human Action in Thomas Aquinas, John Duns Scotus &  
William of Ockham*

Washington, D.C., Catholic University of America Press, 2014,

pp. xxv + 250, ISBN: 978-0-813-22178-6, A/5, \$59.95

---

藤 本 温

本書は、三人の神学者——トマス、スコトゥス、オッカム——による行為論を比較して、それぞれの行為論の特徴を明らかにしようとするものである。テーマとしては、人間的行為の原因、実践的推論、状況、行為の種別化、無関係な行為等が扱われている。本書評に先行する論評において、この書は三者の比較に際して、トマスを‘default’ (T. Williams) ないし ‘touchstone’ (M. V. Dougherty) としていると評されており、たしかにトマスが本書の中心にいるという傾向はあると思われる。そこで、内容に立ち入る前に、近年のトマスの行為論研究史のなかでの本書の位置を少しだけ描いてみることから始めたい。

全5章のうち、実践的三段論法を扱う第2章を除けば、日本の中世哲学研究者によって取り上げられることの少ない、そして全体としては地味なテーマが扱われていると思われるかもしれない。しかし、トマス研究において行為の記述や種別化の問題は、近年、(本書ではほとんど扱われていない) G. E. M. Anscombe

の『インテンション』や同氏の諸論考から影響を受けて、その種の議論に参加する論者を獲得してきたテーマである。それはやはりトマスが『神学大全』において「行為」に関して体系的で精緻な議論を提示しており、そこに現代的ないし歴史的意味を見出し得ると考える論者が存在するということであろう。直近の20年間の単行本としては Brock, S. L. (*Action and Conduct: Thomas Aquinas and the Theory of Action*, 1998), Pilsner, J. (*The Specification of Human Actions in St Thomas Aquinas*, 2006), Jensen, S. J. (*Good & Evil Actions: A Journey through Saint Thomas Aquinas*, 2010) による特色のある好著が出版され、さらに10年溯るならば Nisters, T (*Akzidentien der Praxis: Thomas von Aquins Lehre von den Umständen menschlichen Handelns*, 1992), McInerny, R. (*Aquinas on Human Action: A Theory of Practice*, 1992), McInerny, R. (*Ethica Thomistica: The Moral Philosophy of Thomas Aquinas*, 1997) 等が挙げられるが、これらは本書においても折りにふれて（主に注において）言及されている。さらにトマスの行為論に関するジャーナル論文を加えるならば、トマスの行為論に関する個別の研究は、着実に行われてきたと言えるだろう。トマスとスコトゥスとオッカムという三人の神学者の行為論を比較して、その共通点の基盤と差異を論じるといふ、Osborne（現在、University of St. Thomas の教授）による今回の意欲的な書を、こうしたトマス研究の流れの延長線上に位置づけることは可能であろう。つまり、トマスの行為論自体の研究が或る程度蓄積されたところで、その次の段階に研究状況を移行させる書が刊行されたのである。本書は、三人の神学者の思想の比較を通じて西洋中世13-14世紀の行為論の全般的見通しを与えるものであり、その時期の行為論研究の前進に貢献する業績である。

本書のテーマのいくつかは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の内容や用語の解釈に出発点をもつものであり、アリストテレス以降の術語の歴史の変遷についても一定の目配りがなされている。各章の個別のテーマに関して、三人の神学者の理論について現代の解釈者の理解が必ずしも一致しているわけではないので、比較に際しては、解釈を一つに固定して、あるいは断定を避けたままで三者を比較せざるを得ないこともあるが、Osborne は二次文献を注で指示して、論争中の論点は分かるように配慮されている。Osborne 自身が単著論文においてより詳しく論じた議論が前提となっている箇所もある。

次に、全5章の内容を順に概観する。

第1章「行為の原因」：行為の原因は意志なのか知性なのか、あるいは認識されている対象なのか。トマスによると、意志だけが自己の働きの作出因であり、認識されている対象は作出因ではなくて、目的因の秩序において影響力を発揮する。一方、オッカムは、認識されている対象は、自由な人間的行為の作出因であると考えており、スコトゥスもたいていそう述べるが、スコトゥスとオッカムは、自由に関しては、意志がより主要な作出因でなければならないと考える。

第2章「実践理性」：実践的推論の結論は行為なのか判断なのか、モラル・サイエンスと思慮の関係、テクニカルな技と思慮との差異、実践的推論の諸前提の認識等が本章のテーマである。

トマスは実践的推論の「段階」を区別しており、十全に実践的な三段論法の結論は選択の判断であるとする。スコトゥスによると、選択が生じるのは、行為が知性によって意志に提示された後であり、思慮が行為により近いと考えられるのは、単に、行為というものはより少なく普遍的だからである。オッカムによると、モラル・サイエンスと思慮は、なされるべきことについての結論を命じるが、テクニカルな技と経験は、いかにして何かがなされるべきかについての直示的な知識を与えるにすぎない。

スコトゥスとオッカムは、実践的三段論法の正しさと、思弁的三段論法のそれを区別することはなく、実践的三段論法の結論は、単に、何かなされるべきかについての言明にすぎないとする。行為には意志の付加的な働きが常になければならないのである。

第3章「働きの諸段階」：アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第3巻(1-4)における(1)意志(願望)、(2)思量、(3)選択という3段階を三人の神学者はどのように理解しているのか。トマスはもっとも複雑な説明を与えており、少なくとも8つ、最大で12の段階を考えている。スコトゥスは5ないしそれ以下、オッカムは6段階である。

トマスの12段階というのは古典的な説明であり、近年では、トマスは4段階だけを考えていて、それらはそれぞれ2つの要素をもつことから合計8段階になるとする研究もある。オッカムによる6段階とは、(1)知性による目的の提示、(2)目的について意志すること、(3)思量、(4)判断、(5)選択、(6)実行である。スコトゥスでは(3)と(4)を区別しないため5段階(ないしそれ以下)となり、自由と道徳的責任の場所としての「選択」に焦点を当てるとされる。

少しコメントしておくとして、そもそも「働きの段階 stages」とは何か（論述の過程で step とも言い替えられている）、それはトマスというよりは、トマス研究上の用語である。歴史的権威のコレクションにすぎないと言われることのあるトマスによる「働き」の議論が、本章ではトマス研究上の「働きの stages」の議論を介して、スコトゥスやオッカムの理論と比較されていることになる。やはり stages という用語の本性をより明確に規定して、トマスの stages に関して Osborne 自身の立場を提示した上で比較を実行する方が、たとえばオッカムの場合、享受と使用の区別は愛の種類の違いであって、意志の働きの stages の間の区別ではないと言われることの意味も、トマスとの差異もより明らかになると思われる。

第4章「行為の評価と種別化」：トマスによると、行為の種は近接の目的からとられ、遠い目的は付帯的なものである。スコトゥスの考えでは、いくらかの行為は、道徳的に関連する目的から離れて意志され得る。オッカムは正しい理をも含むように状況のリストを拡張して、正しい理の考えが有徳な行為の記述に本質的であるとする。オッカムは内的な意志の働きの焦点を当てており、道徳的行為が内的であるのは、それらが他者によって観察されることができない意志の働きであるという意味においてである。観察される行為は、それらが意志の内的働きによって結果的に引き起こされる限りで価値をもつ physical な行為にすぎない。

第5章「無関係な行為、善き行為、功績的な行為」：トマスによると、内的行為と外的行為はともに、行為全体の善さないし悪さに異なる仕方で寄与する。スコトゥスは、外的行為はそれ自身の道徳的価値をもつと言う。オッカムは、外的行為の道徳的価値は内的行為の道徳的価値に由来すると語ることに於いてトマスに部分的に似ているが、外的行為は physical な行為であると主張する。

トマスは、いかなる個々の行為も無関係な・中立的な (indifferent) ものではありません。スコトゥスによると、多くの個々の行為は道徳的に無関係であり、オッカムはそうした行為についての伝統的問題に触れることはないけれど、それが存在することを想定して議論することはある。

トマスによると、道徳的に善い行為もそれ自身は、厳密には功績的・功業的ではありません。愛徳不在の行為者による行為は道徳的に善であり得るが、功績に対しては無関係である。スコトゥスの考えでは、愛徳をもつ行為者でさえ、功績に対して無関係な道徳的に善い行為をなし得る。いくらかの行為が道徳的に無関

係（中立的）であるのは、それらが道徳的に価値ある目的に方向づけられていないからである。そして、誰かが功績に対して中立的である善い行為を遂行できるのは、これらの行為が神へと方向づけられることなしに遂行され得るからである。オッカムは、行為は道徳的に中立的であり得るし、功績に対して中立的であり得ると単に想定していると思われる。またオッカムは、通常は罪である行為にさえも神は功績を許し得るだろうという強い主張を行う。

三者の行為論の「比較」の問題に戻ろう。今、概観した、本書の第1章から第5章の配列は、トマスの『神学大全』第1-2部・第6問題から第21問題における、人間的行為の議論の順におおよそしたがっている。こうした議論の配列の仕方も一つの要因となって、本書はトマスを‘default’ないし‘touchstone’としているという評がなされたわけである。スコトゥスやオッカムは、状況や選択、意図や命令、無関係の行為等々について、トマスのように体系的に詳しく論じていないため、本書におけるOsborneの論述の仕方は、スコトゥスとオッカムに対してフェアではないと言われるかもしれない。Osborneは、トマスはスコトゥスやオッカムよりも「偉大な人物」、「より深い思想家」、「最も洗練された説明を与えている」と述べており、トマスの倫理的思考に近いところにかれ自身はいることがうかがえる。

とはいえ、比較に際して何らかの方法を採らざるを得ないことも事実であり、Osborneはこの三人の神学者の行為論の比較に伴うさまざまな問題に無自覚であるわけではない。すなわち、スコトゥスは、道徳心理学について多くを書き残してはおらず、それに関する議論はあまり体系的ではなく、しばしば、特定の問題のコンテキストにおけるものであること。オッカムの論述はさらに少なく、いくらかの問題へのかれの貢献の精確な本性を決定することは困難であり得ること。スコトゥスはトマスを批判する以上に、他の人物を批判することに関心があること、オッカムは第一義的にトマスやスコトゥスに関心があったわけでないこと、近年の研究者はトマスとスコトゥスを、かれらの同時代人の頭上にそびえ立つ人物として考察してきたが、中世の思想家たちは、このパースペクティブをもってはいなかったこと、そしてこの三名の倫理思想についての現代の研究状況の進展具合にもかなりの差異があること、これらをすべてOsborneは認識している。こうした困難を理解した上で三者の比較に乗り出し、スコトゥスによるad hocな議論や、オッカムによる手短な議論をトマスによる体系的説明と比較するので

ある。こうして本書は、表題からは三者の均等な比較が予想されるかもしれないが、実はトマス色をいくらか帯びたものとなっており、トマスの思想の体系性が読者に伝わると同時に、行為論におけるスコトゥスの繊細さや鋭さ、オッカムの新しさが伝わる書となっている。Osborne 自身は、「結論」の章において、「本書が、かれら [三人] の哲学的見解はそれ自体で重要であることを示したことを望む」と言っており、たしかに、三人の神学者それぞれの立場が或る視角から明快に提示されている点でその希望は達成されている。もちろん、三人の行為論を比較するための他の論述の方法もあり得るだろう。

本書において考えさせられるのは、西洋中世における倫理思想関連の語彙の意味の変遷であろう。たとえば、「外的行為」といっても、オッカムはそれを単に natural act であると考えるとか、スコトゥスにとって「選択」は二義的であるが、オッカムは一義的に使用するというように、同じ語の異なる意味での使用や多義性や変遷について Osborne は注意深い。一方、スコトゥスの使用する affectio という語を inclination と訳して、トマスの場合の意志の natural inclination に言及するときのように（第 1 章）、異なる言葉が同じような意味で使用されている場合の比較や論述に関しては、より念入りに検討するときには警戒が必要になるであろう。用語の変遷や分類の問題は、中世のスコラ学者の行為論の場合にかぎらず、比較研究にともなう根本問題であるだけに、本書は比較研究の方法論についても考えさせられる書である。

---

大森正樹著

『観想の文法と言語——東方キリスト教における神体験の記述と語り』

知泉書館, 2017 年, xvi + 507 + 16 頁,

ISBN: 978-4-862-85265-6, A/5, 7,000 円

---

袴 田 玲

本書は、「観想 *θεωπία*」を中心テーマとして、東方キリスト教思想家——主に『フィロカリア』中に収められた師父たち、ディオニュシオス・アレオパギター